竹林寺天文台遺跡の発掘調査現場公開

日時：平成 27 年 12 月 12 日（土）10 時 30 分～12 時

場所：浅口市鴨方町本庄、小田郡矢掛町南山田

京都大学 KYOTO UNIVERSITY

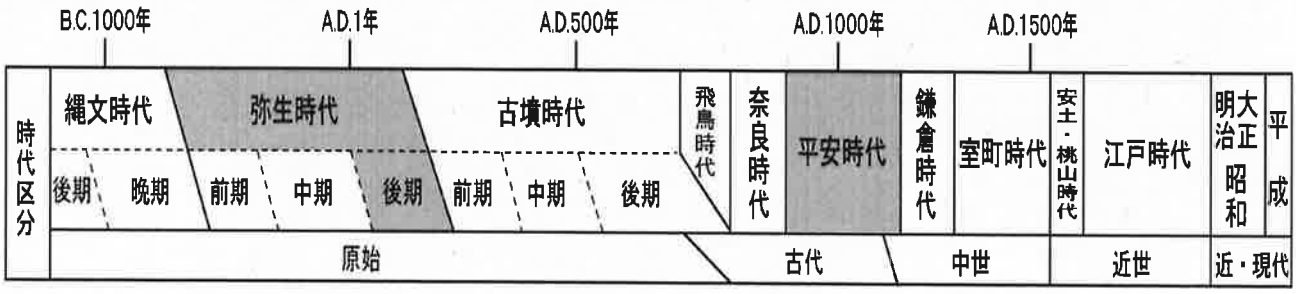
浅口市教育委員会では、国立大学法人京都大学の新天文台（3.8m望遠鏡）建設事業に伴い、平成 27 年９月から発掘調査を進めています。

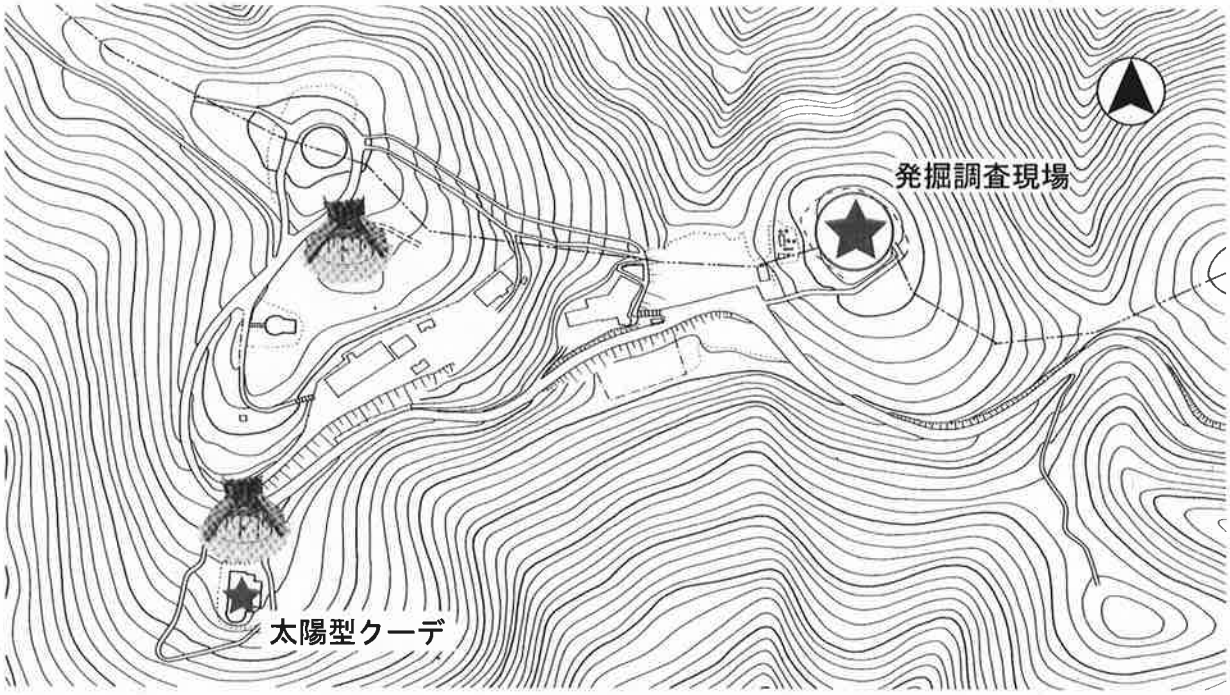
竹林寺天文台遺跡の当調査区は、遙照山山系の丘陵尾根の頂部、標高約 340mに立地しています。南側の眼下には瀬戸内海、北側には吉備高原を望みます。

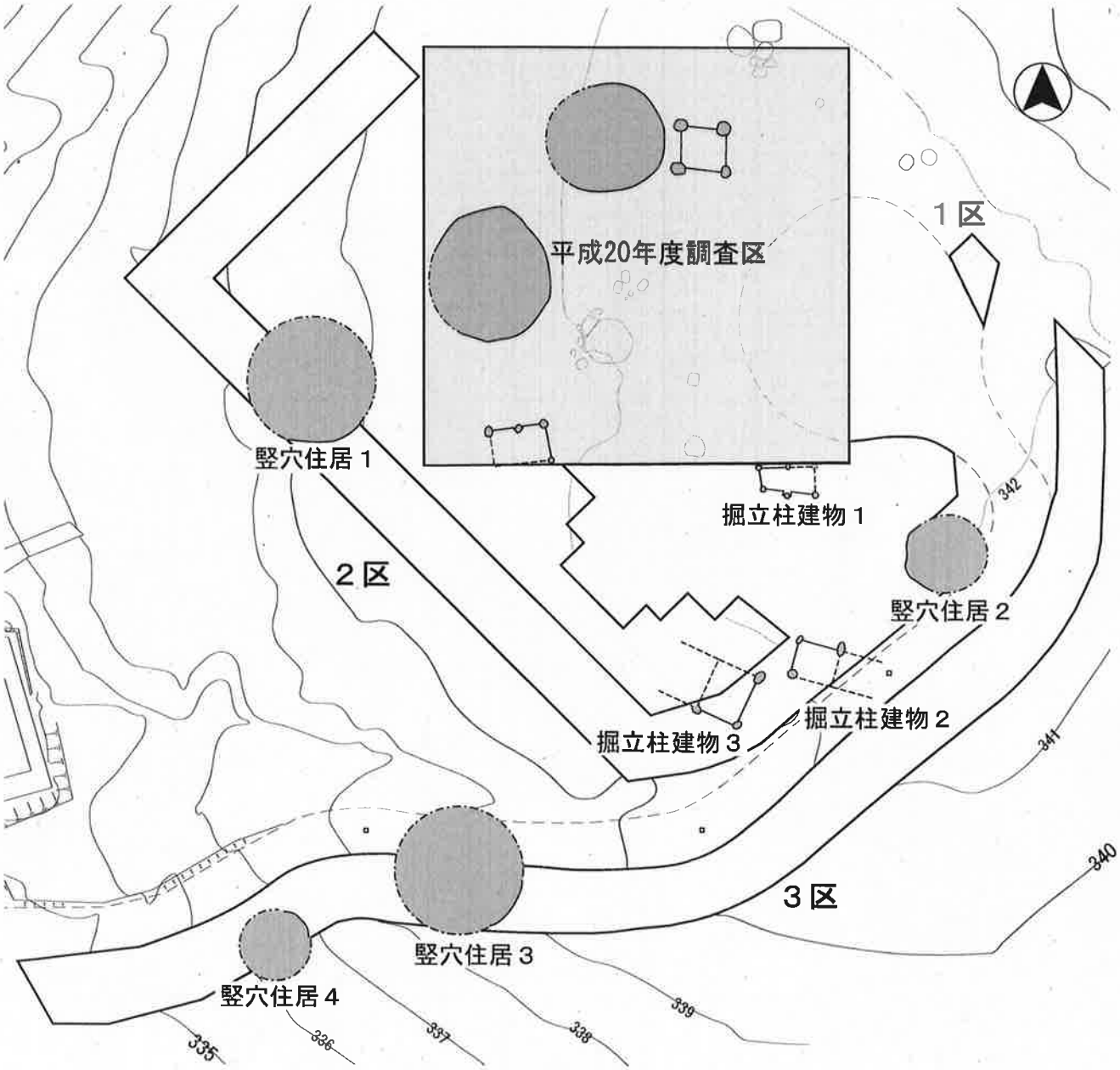
竹林寺天文台遺跡は、西側丘陵での昭和 40 年代の国立天文台 65 ㎝クーデ型太陽望遠鏡建設時に弥生土器や石器等の発見により存在が明らかとなりました。その後、平成 15 年度の確認調査により弥生時代の竪穴住居等が確認されました。当地点（東側丘陵）は、平成 17 年度の試掘調査で弥生時代の遺構や遺物が確認できたため、竹林寺天文台遺跡の範囲が拡大されました。平成 20 年度の発掘調査により、弥生時代後期（約 1,900 年前）の竪穴住居２軒、掘立柱建物２棟や古墳時代以降の遺構が確認できました。

今回の調査で、弥生時代後期の竪穴住居４軒、掘立柱建物３棟、溝、土坑、柱穴等が見つかり、ムラの様相が次第に明らかとなってきました。竪穴住居の規模は、１で径約７m、２で径約５m、３で約８mを測ります。当丘陵は、頂部周辺には流紋岩が露頭し、比較的浅い所で岩盤が現れます。標高が低くなると、柔らかい性質の赤色粘土となります。竪穴住居のように掘削面積の広い遺構は、この頂部から少し下がった箇所に作られていることが判明しました。遺物では、弥生土器、土製勾玉［竪穴住居３］、石錘［竪穴住居１］、サヌカイト片等が出土しています。この丘陵全体が、弥生時代の集落として多くの人々が生活していたことを物語っていると考えられます。また、平安時代の土師器や須恵器が多く出土しました。この時期の土坑や柱穴も見つかっています。

竹林寺天文台遺跡は、岡山県南西部の歴史を考えるための貴重な遺跡であるといえます。







弥生時代の遺構模式図（S=1/400）